

雑誌『新原』と『志鋤研究』

徳永，博文
志免町教育委員会

<https://doi.org/10.15017/10151>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．23，pp.91-116，2008-03-28．九州大学附属図書館付
設記録資料館産業経済資料部門
バージョン：
権利関係：



【資料紹介】雑誌『新原』と『志鋌研究』

徳 永 博 文

一 糟屋炭田の石炭史

福岡県の主な炭田としては、筑豊炭田・三池炭田・福岡炭田（糟屋炭田含む）・宗像炭田・朝倉炭田があつたが、これらの炭鋌は、福岡藩が、明和年代（一七六四～七二年）に、製塩作業時に石炭を燃料として使用するようになり、採掘が活発化している^①。当初は鞍手、遠賀、穂波、嘉麻、糟屋、那珂、席田の各郡から産出された石炭も、天保年代（一八三〇～四四年）に入ると『焚石会所作法書』（一八七三）などの規定が設けられて、藩の統制のもとで石炭の採掘が行われる^②。

焚石丁場という村共同体もこのころから出現する。志免町岩崎神社絵馬堂には、一八五六（安政三）年に描かれた、「丁場連中」と奉納者が書かれた絵馬がある^③。ここには二人の奉納者が書かれているが、これらは石炭丁場がここにあり、ギルド的な存在を示すものではなかったかと推測される。この絵馬は『黒田二十四騎図絵馬』といい、志免町指定文化財になっている。ちなみに『福岡県地理全誌 十一』一八七五～一

八八〇（明治八～一三）年では、「石炭鋌場（丁場）」の筑前の炭坑数（明治六年ごろ）には次のように記載されている。糟屋郡（志免村一・井野村一・炭焼村八・宇美村四・新原村一・篠栗村二・立花口村一の計一八坑）、席田郡（下月隈村一・雀居村一・平尾村一の計三坑）また、筑前計では一八四坑中二一坑が挙げられている^④。

明治時代にはいると、県内でも石炭が商品として広く売られるようになるが、政府は石炭を専有し、外国人の鋌山経営を排除してゆく。イギリスから購入した軍艦「浪速」と「高千穂」の燃料を、イギリス炭から国内炭へ切り替えることを目的とするものであった。

そうしたなか、海軍省は、一八八六（明治一九）年に石炭調査委員会を設置し、全国の炭質を調査し、一八八九（明治二二）年、糟屋郡、鞍手郡、嘉麻郡（今の嘉穂郡の一部）、田川郡の内三八カ村を海軍予備炭山に指定した^⑤。

明治中期になると、福岡県は日清戦争による活況を背景に、我が国の石炭産出量のほとんどをしめるようになり、日露戦争は、石炭業界に再

び活況をもたらした。そして、第一次世界大戦により、採掘への労働力投入がなされた。『糟屋郡志』一九二四（大正一三）年の鑛業によれば、一九二一年の糟屋の鑛産物では、八、九三九、九四〇坪の鉾区内に、官業鉾区は、二、一七〇、五三二坪で三ヶ所。民業鉾区は、六、七六九、四〇八坪で一七ヶ所あることがわかるが、官業とは海軍燃料廠採炭部の直営を言っている⁽⁶⁾。

その後の恐慌で、炭鉾の休廃止が相次ぐが、第二次世界大戦が勃発し、その間は、国内各種工業の勃興によつて石炭の需要が増大する。こうした流れの中、糟屋炭田は、西戸崎東から三笠川ぞいに走る博多・二日市構造線と呼ぶ断層以東の地区に所在し、狭義の福岡炭田（姪浜、西新、田島、月隈、土井など）とともに、西戸崎炭田と糟屋炭田（宇美・志免・須恵・粕屋・篠栗・久山）が主炭鉾として採掘が行われた。炭質は発熱量六、〇〇〇～七、〇〇〇カロリーの瀝青炭である。都心に近く、交通網が発達し、各方面への石炭の搬出は非常に便利であった。

終戦二年程は減産となった石炭産業も、一九五一（昭和二六）年からの朝鮮動乱で、石炭市場が一時拡大した。『九州炭鑛名簿』（一九五〇年七月）には、当時の主な糟屋の炭鉾が記されている⁽⁷⁾。

明治から昭和にかけての糟屋炭田の主な炭坑を挙げると、志免町では、「亀山炭鉾（一八七二～一九六〇）」、「粕屋炭鉾（一八八九～一九四〇）」、「田富炭鉾（一九一七～一九三三、一九五三～一九六二）」が坑口を開けた⁽⁸⁾。粕屋町では、「敷島炭鉾（一九〇五～一九二七）」、「仲原炭鉾（一八八八～一九二九）」が採掘しており、須恵町では、海軍炭鉾「第一坑（一八八九～一九〇〇）・第二坑（一八八九～一九〇〇）・第三坑（一八九三～一九三一）・第四坑（一九〇一～一九五〇）・第六坑（一九二二～一九

五六）」のほか、「植木炭坑（一八八九～一九二四）」、「長礼炭鉾（一九〇六～一九一九）」などがあつた。

宇美町では、「三菱炭業（株）勝田炭鉾（一八九七～一九六三）」、「大谷炭鉾（一八九九～一九六三）」などが採掘している。篠栗町では、「津波黒炭鉾（一八八四～一九二五）」、「明治炭業（株）高田炭鉾（一九〇五～一九五八）」、「若杉炭鉾（一八九〇～一九六一）」が採掘し、久山町では、「高田炭鉾久原坑（一九二二～一九五八）」、「麻生産業（株）山田炭鉾（一九四八～一九六七）」で採掘している。

しかし、これらの炭鉾は、一九五三（昭和二八）年以降再び合理化がすすめられたため、一九五五年の石炭炭業合理化臨時措置法の施行とともに、閉山が相次いだ。県内では、大炭鉾であつた三井田川炭業所が一九六四年三月に閉山し、旧志免炭業所も同六月に閉山した。糟屋郡では一九六七年の麻生産業山田炭鉾が最後に閉山し、石炭産業が終焉し、炭鉾はなくなった。

さらに県内の採掘は、一九九七（平成九）年、三井石炭炭業（株）三池炭業所が閉山し、その歴史を終えた。

二 旧志免炭業所の歴史

海軍予備炭山時代

糟屋炭田にふくまれる旧志免炭業所の歴史は、一八八八（明治二一）年、政府が隣町（須恵）の新原を海軍予備炭山に指定することにはじまる⁽⁹⁾。糟屋炭田一八ヶ村で指定があり、直ちに地質調査が行なわれ、海軍燃料の自給のために新原採炭所を開坑する。一八八九年、海軍は一坑、

二坑を開坑したあと、翌年、政府は勅令で新原採炭所官制を發布した。同年からは、佐世保鎮守府所屬として採掘することになった。

一九〇〇（明治三三）年に『海軍採炭所管制』が発令、海軍採炭所（海軍艦政本部所屬）として採掘している。一九〇五年に会計も、海軍採炭所特別会計とし、一九一〇年からは直営で採掘する。

海軍燃料廠採炭部時代

一九二二（大正一〇）年には、旧来の海軍採炭所から海軍燃料廠へと変わり、新原も海軍燃料廠採炭部（呉鎮守府）となる。その後は、急速に炭鉱機械の整備が行われ、一九二九（昭和四）年には、それまで本部があつた新原から、第五坑（一九〇六～一九六二）に本部を移し、新庁舎を建設した。そして、第七坑（一九二四～一九三八）、第八坑（一九三八～一九六二）、堅坑（一九四九～一九六二）とともに採掘を続けたのである。また、共済会館、病院、奈多会館など教育・医療・福利等の施設充実に力をいれた。

石炭産出量は、一九三七年前後にピークを迎え六一五、二〇〇tとなっており、前後一〇年間は全坑で五〇万t前後である。

運輸省門司鉄道局志免鉱業所時代

終戦後、日本は連合軍総司令部による間接統治が実施され、政府は石炭生産緊急対策要綱を定め、復員軍人緊急充足実施要綱を発表し、炭鉱の再建に力を入れた。海軍炭鉱は、当時、大蔵省が特殊財産として管理していたが、一九四五（昭和二〇）年に運輸省が経営を引受け、運輸省門司鉄道局志免鉱業所となった。

運輸省志免鉱業所時代

政府は一九四六（昭和二一）年、運輸省の直轄に移した。翌年、臨時石炭鉱業管理法が制定し、連合軍総司令部経済科学局の石炭調整官副長バトラー（E・T・Butler）氏を団長とする炭鉱特別調査団が、増産を督励し、五度にわたり来所している。

一九四九（昭和二四）年に運輸省の組織改正によって「日本国有鉄道志免鉱業所」と改称し、輸送用石炭の採掘炭山となる。

鉱業権は戦後、大蔵省に移り、運輸省は資産を借用して経営を続けてきたが、一九四九年に鉱業権の登録が終わり、日本国有鉄道が経営を始めてから九年目にして日本国有鉄道へ鉱業権が移った。その間、坑内主要坑道の延長や、坑底坑道と第八坑との連絡坑道、および、排気立坑と坑内主要坑道の貫通工事などに着手し、一九五四年にはほぼ完了し工事を終え、巻揚機や各機械の蒸気動力を、次第に電力へ移行した。その後、一九五七年に立坑の全体工事が完成している。

一九五五年、『石炭鉱業合理化臨時措置法』が施行され、行政管理庁は国鉄に対して、鉱業所の事業を国鉄から切り離すことを勧告した。一九五七年、地元である須恵・志免・粕屋・宇美の四町は国鉄の払下げ方針に反対、各町で反対対策委員会を設置し、この委員会を統合して反対期成同盟会を組織した。同盟会は国鉄総裁、政府や国会、県にと陳情行動を続けたが、「売山」にもなつた反対闘争は、戦後の日本労働運動史に記録される争議にまで発展した。

一九五八年、払下げ反対四ヶ町抗議集会を開き、地元の反対運動が高まる中で、国鉄総裁は同年、運輸大臣に払下げ認可申請書を提出。翌年、運輸大臣は払下げ申請を内諾し、組合に従業員整理（希望退職、配置転

換)が提示され、一九六三年に閉山する旨の通告が行なわれた。

一九六四年六月三〇日に、エネルギー革命により志免町から炭山の火が消える。一八八九(明治二二)年創業から続いた七五年間の歴史を閉じた後は、志免炭鉱整理事務所時代が続ぎ、石炭鉱害等の処理が行なわれた。

閉山で、従業員の配置転換や、離職にもなつて人口流出があいつぎ、福岡県が刊行している「福岡県統計年鑑」では、一九五二年の最盛期の人口が二三、〇〇八人に対し、一九六二年では一六、五一三人にまで減少している。^⑩ 鉱業所の浮沈が町の行政・財政に与えた影響ははかりしれないものがあつた。

三 雑誌『新原』と『志鉱研究』について

海軍燃料廠採炭部時代には『新原』という雑誌を、海軍燃料廠採炭部が発行しているが、昭和九年八月号、昭和一〇年一・四・五・七・八・一二月号、昭和一一・二・三・五月号、昭和一三年一・四・七月号、昭和一四年二・八月号、昭和一四年一〇月号(創業五十周年記念号)、昭和一四年一二月号が現存している。また、昭和四年一月号から一二月号(創業四〇年記念号)までと、昭和一三年六月号(七坑ガス爆発追悼号)の複写資料がある。(表1の寄贈・所蔵者の欄を参照)

『新原』は、大正一三年一月に、技術係員の研究、知識交換期間として謄写版刷りの雑誌で、体裁はB五判謄写版刷りで、綴綴であった。大正一五年から活版印刷になったが、昭和二年一月から、全従業員に読ませるために、それまで海鉱会の運営であつたが、共済会が行つようになつ

ている。終期は不明である。

雑誌には、当時としてはハイカラな挿図・挿絵や写真が多用されている。また、右開きの縦書きであるが、段組を二段・三段としたり、ルビを施すことは次に説明する左開き横書きの『志鉱研究』には見られない点である。

内容的には教育修養の機関紙といえる。その他に、作業上の報道や論説、技術、表彰のほか、短歌、俳句、逸話・挿話のたぐい、小説、雑録(野球試合)など趣味のものも取りあつかい、炭鉱界からは嘗てない推賞を受けた雑誌であつた。

以下が『新原』目次の抜粋である。



第七〇號



第六〇號



第一八二號
(新原の表紙)



第一四五號



第一二七號

表1 海軍燃料廠採炭部発行『新原』総目次*

発行年月	巻数	目次または内容	執筆者	備考	寄贈・所蔵者
昭和四年一月號	第六巻 第六〇號	論説 御大礼感激記 新年の辞 倫敦にて御大典を迎ふ チエンの改善に就て 救急心得 真嶋布教師法話の一節 青年諸君に望む 新美人主義の提唱 平凡なる感想 (三) 理想を尚ぶ 大礼觀兵式に就て お正月の縁起 水を飲むべし 書道断片 (二) 上欄 表彰 己 賢論愚論 努力 君の御為国の為 逝く年を惜む 自営論 昭和四年からは 起て々々青年 海浜にて 下欄 青訓諸君に望む 春の幸福 忘れな草 酒囚を脱せよ 木枯の冬 真の勇氣 怒りを制せよ お正月 暮の街 文苑 勅題短歌 新年行進曲 雲仙旅行記 吾輩は一銭銅貨 立花城 (二) 母と娘 (八) 短歌 新年名句 俳句 俳句 雑録 野球試合	長田正義 萩尾善次郎 猪俣昇 船越唯雄 くらた 辛川翠村 江上生 KH生 国崎生 喜多崎 一會員 木原孝城 NK生 天理生 相良生 鹿毛静穂 藤木安長 赤陽 木代字 四宮辰雄 津与志 伊佐務 森山種吉 百田 四宮辰雄 奈賀登志 高橋民一 梶山 はきの家 むらた 弁太郎 大河内伝二郎 よしだ 樋口鉄幹 第六坑みどり会 第四坑句会	採炭部長 業務課長 海軍技師 第六坑 *ベンネーム	福岡地方史研究会
昭和四年二月號	第六巻 第六二號	論説 年頭に際し部長の訓示 勅語奉読式 己巳年頭漫言 救急心得 修養団講習会に参加して 平凡なる感想 (四) 官業労働者と労働運動 信仰 書道断片 (三) 新原に直面して 石炭の由来 上欄 表彰 満鮮視察旅行記 下欄 莊嚴なる呼声 年頭の偶感 冬の夜道 断片 胆力と勇氣 文苑	大町桂月 岩橋 江上生 研究生 高田照教 一會員 赤陽 Y生 三角虎夫 江上生 鹿毛静穂 常男 天理生 大河内伝次郎	第五坑 *ベンネーム	福岡地方史研究会

		明治天皇御製 訓歌 栗山大膳（一） 母と娘（九） 手巾の秘密（一） 俳句（春浅し） 俳句 雑録 男の意気 青年団弁論会 雑誌「若杉」生る 一言集 食道楽 野球試合	松本木代字 よしだ 樋口鉄幹 武広政敏 第四坑句会 常男 野瀬正美 K H 生 山田生		
昭和四年三月號	第六卷 第六三號	論説 昨年の回顧と年頭の希望 伸展の生活 歎を頌ち希望を述べ 剣道の変遷発達（一） 英国視察ノートより（一） 採炭部常識（一） 炭坑人生觀 修養団講習会に参加して（二） 上欄 辞令 第五坑町名頌歌 反省 下欄 杭木に就て 明るき吾等 得意の時 編輯室より 文苑 只一路 紀念の一日 笑話一束（一） 行脚の一節 新原俳壇 雑録 中央病院新築落成式 武道大会 野球試合 三月中行事予定	長田部長 坂本昌之 萩尾技師 右田琢之助 猪俣技師 山田 大町桂月 岩橋 権丈生 百武生 メートル生 田中勝蔵 野瀬正美 K H 生 大野三郎 猪俣技師 樋口鉄幹		福岡地方史研究会
昭和四年四月號	第六卷 第六四號	論説 陰徳陽報（表紙） 英国失業鉱夫の惨状 災害予防章 生る道程 採炭部常識（二） 感謝の生活 書道断片 英国視察ノートより（二） 講習会に参加して（三） 上欄 表彰 吾等の力 ドリル 労働と思慮 杭木に就て（二） 下欄 一言集 雄弁 自信 本部チーム評 文苑 春訪る 母と娘（十） 我輩ドリルである 新原俳壇 雑録 四月中行事予定 野球試合	杉本務 猪俣技師 大町桂月 K H 生 山田 高田布教布 一會員 猪俣技師 岩橋 田中勝蔵 庄野ボン助 津与志 メートル生 大河内伝二郎 鹿毛静穂 百武生 球狂児 樋口鉄幹 梅公		福岡地方史研究会
昭和四年五月號	第六卷 第六五號	論説 自然に服し自然を支配せよ（表紙）			福岡地方史研究会

		病院施設と保険給付 英国の鉱夫さん 剣道修行の指針（一） 仏教生活の第一歩 真実の家 平凡なる感想（五） 青年団弁論大会 上欄 辞令 責い哉労働 満鮮視察旅行記 下欄 おいらが村 明るい心 真の友 文苑 笑話一束（二） 母と娘（十一） 新原俳壇 雑録 教習所技術科卒業式 教習所入所式 表彰 青年団退団式 柔剣道試合 野球試合	杉本務 猪俣技師 右田琢之助 高志 阿部生 江上生 持田次雄 三角虎夫 鹿毛静穂 天理生 ゆう生 猪俣技師 樋口鉄幹 鉄幹 鉄幹	会計課長 主計中佐	
昭和四年六月號	第六卷 第六六號	論説 専断を戒む（表紙） 日本海々戦の回顧と吾人の覚悟 坑内爆発に就て 無傷病者表彰に就て 剣道修行の指針（二） 汝自身に問へ 上欄 町総代任命 禿頭礼讃 この覚悟 愛 下欄 青年よ誘惑に勝て 青年と言論 至誠に打算なし 青春雑感 文苑 ライン河を遡る 母と娘（十二） 新原俳壇 雑録 山神祭々典並に慰安会 青年団及軍人会大運動会 野球試合 庭球試合 六月中行事予定	竜宝英夫 冷川 保険組合 右田琢之助 江上生 奈美井 角十 大藤嘉助 大河内伝次郎 権丈次郎 赤陽 鹿毛静穂 猪俣技師 樋口鉄幹		福岡地方史研究会
昭和四年七月號	第六卷 第六七號	論説 西洋かぶれ（表紙） 衛生講話 剣道修行の指針（三） 如何に生く 安心立命 立派な人 国體の精華 上欄 熱情と雄弁 下欄 害虫と其予防方法（一） 文苑 黒田如水侯 思ひ起す尼港の願末（一） 母と娘（十三） 夏の夜 新原俳壇 雑録 新庁舎敷地地鎮祭 七月中行事予定	浅野政次 松本博士 右田琢之助 江上生 ××生 阿部生 津与志 江上生 百田生 よしだ 安川久 樋口鉄幹		福岡地方史研究会

		家内工業調査委員会 第四坑婦人会の清遊 第五坑婦人会の清遊 青年訓練科の出席率に就て 野球部内リーグ戦			
昭和四年八月號	第六卷 第六八號	論説 指導者たる地位にある者の自覚 係員の地位の変遷と其の重点 蠅及蛆の発生防止に就て 精神を鍛へ サボテンは語る 上欄 辞令 八月中行事予定 一言集 偶感 下欄 理想と空想 害虫と其の防除法（二） 文苑 第四坑行進曲 シカゴ「スチブンス」より 思ひ起す尼港惨劇の顛末（二） 「生の松原」の由来 母と娘（十四） 新原俳壇 雑録 野球試合 記念号発行に就て 酒保名称改正	長田部長 萩尾課長 竜宝英夫 御幡淳策 江上生 稲永利雄 権丈生 鹿毛静穂 百田生 緒方純基 猪俣技師 安川久 よしだ 樋口鉄幹		福岡地方史研究会
昭和四年九月號	第六卷 第六九號	論説 帰朝挨拶（表紙） 精神講話 外遊余談 三つの信条 「カルチャー」小論 偶感 仕事の実 害虫と駆除法（三） 上欄 辞令 労働の快樂 下欄 天人 静夜吟 文苑 日出生台たより 思ひ起す尼港惨劇の顛末（三） お妻塚の由来（一） 母と娘（一五） 新原俳壇 雑録 野球試合 第三回従業員講習会予告	猪俣技師 柴田栄寿 猪俣技師 権丈生 江上生 吉村生 尾崎津与志 百松生 鹿毛静穂 稲永利雄 冷川 安川久 角法生 樋口鉄幹		福岡地方史研究会
昭和四年十月號	第六卷 第七〇號	論説 敬神（表紙） 日常生活と誠心 外遊余談（二） 善悪の実相 召集中の體驗 成功の岐路 上欄 吾輩は宝満山 精神生活の第一歩 温和な言葉 下欄 疲勞 善意に解せよ 文苑 靈峰の神秘 月夜幻想曲 松蔭門下の双壁（一） 思起す尼港の顛末（四） 母と娘（十六）	部長 徳永熊六 いのまた 城戸和夫 冷川 安河内生 都志男 都留国吉 鹿毛静穂 堀川生 前平貞次 藤野邦太 四宮辰雄 よしだ 安川久 樋口鉄幹		福岡地方史研究会

[illegible]

		安全週間経過報告 安全週間終了に際し訓示 母性科学 流行性脳脊髄膜炎豫防心得 漢詩講座（八） 文苑 新原雑録 雑録 夏雑録 新原音頭 夏雑録 病床の兄 暴風 山岳禮讃 酷暑行進曲 海水浴 天魔の叫び（一） 一家總動員（一） 兒童文藝欄 雑録 青年訓練所創立記念式 雨乞祈願 書道欄 教習所実包射撃 郷軍時報 辭令・八月中行事豫定表 防火宣傳仁和加上演経経過 野球日誌 誌友通信 共済會購買所配給物品價格表	上田業務課長 大束採炭部長 箕田貢 田中勝三郎 廣木天村 夏雲子 生田徳太郎 上野生 大庭敬彦 正三生 淵上正雄 青谷勲 大里喜市 泰千草 谷口糸重 三浦義人 樋口鐵幹 樋口鐵幹	九大医学部教授	
昭和九年九月號	第一一巻 第一二八號				
昭和九年十月號	第一一巻 第一二九號				
昭和九年十一月號	第一一巻 第一三〇號				
昭和九年十二月號	第一一巻 第一三一號				
昭和十年一月號	第一二巻 第一三二號	記事 年頭之辭 年頭の詞 年頭之辭 年頭之感 年頭之辭 新年所感 除夜の鐘 詩吟講座 兒童心理 人生を觀る（二） 文苑 懸賞文藝作品（和歌） "（俳句） "（自由詩） 新原雑録 釣 筑紫下り一夜の旅 再生の春 新生 仕事場 離愁 別れ 眠れる母よ 雨 日曜スケッチ 二つの心 兒童文藝欄 一家總動員（六） 初夢 雑録 辭令 書道欄 一月中行事豫定表 青年團一日講習會 郷郡時報 第二回團藝品展覽會 漫畫 九大、仁和加上演	上田儀右衛門 田邊優 藤野恭一 猪俣昇 山川廣一 萩尾善次郎 秦重義 編輯子 山口半之丞 今任フサ子 甲木實 夏雲子 未朋 華雲子 樋口時雨 稲永利雄 吉原新 稲永かつたか 吉原新 梅田輝夫 大庭敬彦 稲永生 浦田繁市 樋口鐵幹 甲木泡郎 小野次吉 樋口鐵幹	業務課長・海軍機関大佐 医務課長・海軍軍医中佐 會計課長・海軍主計中佐 工務主任・海軍技師 庶務主任・海軍主計少佐 第四坑長・業務囑託	須恵町立歴史民俗資料館蔵

		共済會購買所配給物品價格表			
昭和十年二月號	第一二卷 第一三三號				
昭和十年三月號	第一二卷 第一三四號				
昭和十年四月號	第一二卷 第一三五號	記事 發電から使用まで 電氣的災害に就て 石炭層形勢の様態（三） 鑛車漫談 文苑 新原雜詠 亡き母を憶ひて 偶感 妹の手記 白木蓮 我輩は猫である 追想 水仙 青春の喜び 春の鳥 春朝淺し 掌 春の午後 十五夜の月 すすろ 雜詠 非常時 雜詠 児童文藝欄 安全はうちわから（一） 雜錄 小林、永野、兩海軍大將來部 辭令 四月中行事豫定表 誌友通信 〃 〃 青年團春季總會 婦人會一夜講習會 春季部内野球大會 郷軍時報 教習所卒業式 愛兒會 保險組合事項（二） 書道欄 共済會配給物品價格表 蔬菜園藝四月中行事	手柴貞敏 緒方勇吉 星加 HY 生 夏雲子 久芳トキ江 下田生 喜久子 田中ユリ子 稻永白雨 三角藤吾 鳥翳生 早乙女 稻永勝隆 小浪 安部弘 三角藤吾 早乙女 末朋 田中エリ子 泡郎 金子正信 中牟田春葉 矢野日出登 清原清 北本忠 百田松雄		須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十年五月號	第一二卷 第一三六號	記事 我艦隊の威力 日常生活に就て 瓦斯炭塵爆發に就て 漢詩口座（一五） 石炭層形勢の様態（四） 鑛車漫談（二） 人生を觀る（五） 文苑 新原雜詠 思ひのまゝに 現代に處する我等 青年の覺悟 平凡の偉大 日本精神と武士道 都會の黄昏 噫現滅 黄昏のスケッチ 春の感情 懐しの異姉 君を思ふ 若草 緑 月下に兄を憶ふ 雨のふる夜 誕生日に 春雨 雜詠 さすらび【ひ】の夢	高橋司令長官 今泉三郎 安部國三郎 廣木天村 星加 HY 生 甲木實 夏雲子 I Y 子 今村辰美 安部弘 秦千草 松本千代子 唐人 高橋正斗 秦千草 樋口時雨 一喜 稻永勝隆 新生園江 幸若久枝 稻永勝隆 松本千代子 松本静香 高橋正斗 一喜	四月五日に、前内閣総 理大臣子爵海軍大將齋 藤實の視察がおこなわ れる。 四月九日に、連合艦隊 司令長官兼第一艦隊司 令長官海軍中将高橋三 吉の視察がおこなわれ る。	須恵町立歴史 民俗資料館蔵

		旅 海戦記念日 日本帝國の花 安全はうちわから (二) 雜録 斎藤海軍大將來部 高橋海軍中將來部 堀田海軍政務次官來部 山神祭々典 教習所入所式 辭令 五月中行事豫定表 兒童欄 婦人會第一支部見學記 春葉一座座員披露 体育時報 鶴田舞蹈團來る 園藝展覽會 書道欄 共濟會購買所配給物品價格表 蔬菜栽培五月中行事	金子正信 泡郎 因正 春葉 勞人 百田松雄		
昭和十年九月號	第一二卷 第一三七號				
昭和十年七月號	第一二卷 第一三八號	記事 失明の原因となる目の疾患と其の豫防 石炭 (六) 米國炭山に於ける變災に就て 漢詩口座 (一七) 人生を觀る (六) 文苑 新原雜詠 〃 日本精神の涵養 入院所感 (一) 從業員講習會愚感 講習會を終りて 麗月夜 夏夜獨想 一タス一ハー 初夏 かゝやき 父の墓に詣づ 新原 初夏の窓 蚊帳 とはの命 雜詠 母を憶ひて 夏來る 實滿攀登曲 安全はうちわから 雜録 辭令 七月中行事豫定表 庭球對抗試合 部内 OB 野球大會 第五坑春季野球大會 書道欄 共濟會購買所配給物品價格表 蔬菜栽培七月中行事	田邊醫務課長 星加 國武 廣木天村 甲木實 夏雲子 五石由貴子 増田一臣 丸山三郎 案浦利光 大志磨生 伊那奈香 三角藤吾 村上末雄 富久生 伊豆唐人 東奴愛生 中村市太郎 千鳥 田中百合子 中村次郎 I Y 子 伊豆唐人 金子碑史洞 Y S 生 中牟田春葉	熊本医科大学教授 鹿兒島教授	須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十年八月號	第一二卷 第一三九號	記事 夏季傳染病に就て 石炭 (七) 漢詩口座 (一八) 九月一日 文苑 新原雜詠 梅雨 河川の氾濫を見る 夏の夕 五分前 先づ健康 微笑 思出の日誌より まぼろしの死	田邊醫務課長 星加 廣木天村 高橋正登 夏雲子 日佐志 Y S 生 稲永勝隆 案浦麗光 増田一臣 安部弘 荏沼愛生 伊豆唐人		須恵町立歴史 民俗資料館蔵

		書斎 坑夫 死 支那人親娘 夏 病と愛 安全はうちから (五) 雑録 第八回全國安全週間 表彰 辭令 健康保險組合會議 部内野球大會 書道欄 御挨拶 八月中行事豫定表 太陽燈照射開始 共濟會配給物品定價表 蔬菜栽培八月中行事	中村市太郎 多毛男 伊豆唐人 園田憲生 金子碓史洞 日佐志 中牟田春葉		
昭和十年九月號	第一二卷 第一四〇號				
昭和十年十月號	第一二卷 第一四一號				
昭和十年十一月號	第一二卷 第一四二號	記事 献納艦上戰戰鬥機 第百回作業講習會 漢詩口座 (二十一) 悟道の栞 (三) 論壇 見真 (二) やはらぎの心 ムッソリーニに告ぐ つきみ草抄 文苑 新原雜詠 大東前部長の榮轉を祝して 感傷の秋 秋の斷片 朝の行事 都會の溜息 落葉 吾等が意氣 秋傷 秋草の中より 無情 亡き友を偲びて 短歌 " " " 新原俳壇 俳句 " 兒童文藝欄 冬の夜 笑顔と繪顔 雑録 辭令 目錄 坑内專問【ママ】語 野球部便り 秋季部内庭球大會 剣道奉納大會 誌友通信 十一月中行事豫定表 書道欄 購買所配給物品價格表 蔬菜十一月行事	廣木天村 瓢々子 藤野生 XYZ生 谷口繁 伊豆唐人 夏雲子 伊豆唐人 稲永勝隆 三角藤吾 泉フジ江 大庭敏彦 眞作詩 三角藤吾 IY子 ひでみ IY子 緑川さゆり 大石一民 野中草鈴 金子碓史洞 ひでみ 中牟田春葉 星加 谷村伊助 百田生		須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十年十二月號	第一二卷 第一四三號				
昭和十一年一月號	第一三卷 第一四四號				
昭和十一年二月號	第一三卷 第四四五號	記事 海軍大臣訓示 年頭二際シ廠員一同二訓示 建國精神と伊勢神宮 漢詩口座 (二十四) 悟道の栞 (五)	大角海軍大臣 山中海軍燃料廠長 三松大受 廣木天村 瓢々子		須恵町立歴史 民俗資料館蔵

		参宮の記 文苑 和歌山雪 俳句水仙 短歌まことの心 人生の春に立つ 元旦の庭に立ちて 孝養心 おもひで 荒寥たる野に立ちて 一羽鳥 宿題 郵便集配人 煙 早春 春を待つ 専賣特許 三苔の濱にて 児童文藝欄 電気安全燈は消へた（一） 雑録 名刺交換會 御用始 工場硬山技藝展覽會 表彰 二月中行事豫定表 辭令 第四坑自治安全會設立 婦人會第二支部講習會 卓球部外對抗試合 書道欄 購買所配給物品價格表	大町桂月 東海磯子 立詩生 増田一臣 伊豆子 富久子 大志磨生 利根川清 稲永白雨 石川眞作詩 松本静香 三角藤吾 中村市太郎 樋口時雨 伊豆唐人 中牟田春葉 上野定八		
昭和十一年三月號	第一三卷 第一四六號	記事 建國祭宣言 海軍軍縮問題及作業に於ける諸注意 漢詩口座（二十五） 失意の我が子を如何に導くべきか 宗教問答（一） 見學の記 悟道の茶 文苑 たそがれ 俳句「寒月」 國際的危機に立つ帝國の立場 石峽と人生 冬の夕暮 詩に生きよ 母の愛 更け行く夜 母の幻 春が来る 落伍者 還炭ガール 俳句「雜詠」 電気安全燈は消ゆる 児童文藝欄 短歌 雑録 建國祭 教習所教練査閲 三月中行事豫定表 表彰 弔辭 賞状 辭令 躍進途上の我卓球部 書道欄 共済會購買所配給物品價格表	上田海軍機關大佐 廣木天村 T・A生 百田 瓢々子 百江 角清風 稲永白雨 三角藤吾 松尾英美 川端や工 松本静香 稲永勝隆 稲永純穂 中村市太郎 江上郁枝 榊原猛夏 中牟田春葉 東海磯子	建國祭が2月10日に第四坑運動場櫻ヶ丘で行なわれている。	須恵町立歴史民俗資料館蔵
昭和十一年四月號	第一三卷 第一四七號				
昭和十一年五月號	第一三卷 第一四八號	記事 塵箱を漁る 國體と家風 安全運動の成績に就て 安全運動に就て	水島三郎 長沼賢海 波井生 加藤鑫	九州帝国大学教授	須恵町立歴史民俗資料館蔵

			斥候と瓦斯検定 盆栽趣味 音楽の話（一） 宗教問答（二） 宇佐神宮参拜記 悟道の菜 文苑 新原俳壇 岸邊の櫻 名残 雲仙 橋の上 残寒 紙芝居 希望の春 初春の宵 櫻あかり 過去を偲びて 電燈 電気安全燈は消ゆる 雑録 山神祭々典 教習所入所式 青年團總會 表彰 敘任辭今 海軍協會事項 誌友通信 同 追悼句會 春季部内野球大會 書道欄 共濟會購買所配給物品價格表	村山重吉 石津 P P P 年 T A 生 谷口茂太 瓢々子 大志磨生 喜美子 吉原生 稲永びほ 樋口時雨 稲永美穂 松本静香 吉原生 青江漱 吉原生 竹野春舟 中牟田春葉 合屋利壽 大庭敏彦 君遷子記		
昭和十一年六月號	第一三卷	第一四九號				
昭和十一年七月號	第一三卷	第一五十號				
昭和十一年八月號	第一三卷	第一五一號				
昭和十一年九月號	第一三卷	第一五二號				
昭和十一年十月號	第一三卷	第一五三號				
昭和十一年十一月號	第一三卷	第一五四號				
昭和十一年十二月號	第一三卷	第一五五號				
昭和十二年一月號	第一四卷	第一五六號				
昭和十二年二月號	第一四卷	第一五七號				
昭和十二年三月號	第一四卷	第一五八號				
昭和十二年四月號	第一四卷	第一五九號				
昭和十二年五月號	第一四卷	第一六〇號				
昭和十二年六月號	第一四卷	第一六一號				
昭和十二年七月號	第一四卷	第一六二號				
昭和十二年八月號	第一四卷	第一六三號				
昭和十二年九月號	第一四卷	第一六四號				
昭和十二年十月號	第一四卷	第一六五號				
昭和十二年十一月號	第一四卷	第一六六號				
昭和十二年十二月號	第一四卷	第一六七號				
昭和十三年一月號	第一五卷	第一六八號				
昭和十三年二月號	第一五卷	第一六九號	記事 従業員に對する訓示 餘裕綽々たる我が海の荒鷲 非常時局と國家總動員 鑛業報國運動強調週間に就て 國民精神總動員強調週間に當りて 建國祭 大山祇神社（二） 救命器に就て（二） 第六回伊勢参宮記 家庭婦人の最大使命 陣中通信 文苑 近詠 新原俳壇 迎春 希望の朝 日本男子 寒空 出征 梅雨の下で弟を想ふ	御宿燃料廠長 土田 加納金三郎 榎本鑛政課長 久良木庶務主任 甲木榮 中島生 古賀生 有田喜太郎 船山黙雷 三角藤吉 林勇 丸山倉太 小山田千代子 丸本せい子 谷口茂太	海軍燃料廠長 御宿好 採炭部長 福岡鉦山監督局	須恵町立歴史 民俗資料館蔵

		折にふれて 繪畫 雜詠 政治 鑛員制約式 鑛業報國強調週間 故早川伍長合同葬 辭令 二月中行事豫定表 新年初句會 書道欄	丸山倉太 大野春雄 松堂生		
昭和十三年三月號	第一五卷 第一七〇號	記事 救命器に就て (二) 戦時と食糧 (一) 國債報國といふこと 新入學兒童に對する母の注意 陣中通信 關君の戦の跡を訪ねて 婦人會の赤誠 南京最前線に参加して 文苑 新原俳壇 西湖の夜 斥候 日本魂の精神 送冬迎春 武道大會記 雪 母のない子 肉彈 雜詠 國民精神總動員強調週間 記念碑建設に就て 第二十九回組合會議 三月中行事豫定表 表彰 弔辭 鑛業報國強調週間成績 辭令 武道大會 書道欄	中島生 龍水生 庶務主任 木原徳次郎 甲木繁 赤星勉 岡田知次郎 庄野照義 入江茂雄 林勇 谷口茂太 丸山倉太 丘ミドリ 平島久光		須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十三年四月號	第一五卷 第一七一號	記事 戦時と食糧 (二) 漢詩口座 独逸の母は子供を如何に育ゝてゐるか 陣中通信 第一線より婦人會の皆様へ 銃後の婦人生活 文苑 新原俳壇 銃前の部隊長より 戦の跡を辿つて 先づ健康 銃後の生活 ミシン 登山 雜録 溢るゝ銃後の赤誠 講習所卒業式 表彰 弔辭 四月中行事豫定表 辭令 故安河内伍長合同葬 保育所退所式 野球試合 書道欄 弔辭・登山會	龍水生 廣木天村 久民巳之吉 安岡繁一 伴たつ子 林勇 今吉茂 入江茂雄 丸山倉太 丘ミドリ 丸山倉太		須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十三年五月號	第一五卷 第一七二號				
昭和十三年六月號	七坑瓦斯爆發追悼號 第一五卷 第一七三號	殉職者写真 令達 殉職者氏名 第七坑變災手記 謹みて弔意を表し併て鑛友諸君の奮起を望む	加納金三郎 猪俣昇	採炭部長 工務主任	福岡地方史研 究会

		變災に際して鑛友諸君に望む 第七坑變災を顧みて 敬愛なりし戦友よ 殉職斜鑛有に捧ぐ 第七坑瓦斯爆發による災害の状況並に應急處置概況及その経過 合同葬儀式典 第七坑變災應急作業終了二當り係員以上二對シ部長挨拶 殉職者追悼號發刊のことば 逆境の慰安 遺族訪問記 英靈を弔ふ 海軍の礎 陣中より 英靈よ安らかに眠れ あゝ英靈 弔句 御見舞、弔花、弔慰金寄贈者芳名	國武干城 緒方彌八 波井生 樋口勇 加納金三郎 吉田儀市 泰厚圓 稲永白雨 田中雪舟 筒井四郎 甲木繁 谷口茂太	第五坑長 第五坑 第五坑 第五坑 採炭部長 専能寺住職 第五坑 第四坑 中支派遣部隊ひ杭州にて 第六坑 第六坑	
昭和十三年七月號	第一五卷 第一七四號	記事 日本精神の誇り 明治天皇の御聖徳と吾等の覺悟 陣中通信 銃後の家庭美談 ラヂオ聴取者として知つて置くこと (二) 神事作法 文苑 新原俳壇 月光 あゝ柴田鹿次郎君を憶ふ 男子の本領 伸びよ人生 最後のマッチ 雜録 従業員修養講習 感話一束 辭令 七月中行事豫定表 家庭栄養料理献立 書道欄	西田榮三郎 星野武雄 兒島宗雄 榊原生 伊藤壽 丸山倉太 田中勝藏 井出上重彦 林勇 豊福寛 一講習員 山田生	第七坑變災殉職者の尊き御靈 の瞑福を祈るため、七月十五日 殉職者追悼號を發刊す 修養團理事 社会教育家	須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十三年八月號	第一五卷 第一七五號				
昭和十三年九月號	第一五卷 第一七六號				
昭和十三年十月號	第一五卷 第一七七號				
昭和十三年十一月號	第一五卷 第一七八號				
昭和十三年十二月號	第一五卷 第一七九號				
昭和十四年一月號	第一六卷 第一八〇號				
	第一六卷 第一八一號				
昭和十四年二月號	第一六卷 第一八二號	記事 作業始に當りて 國民登録制發令せらる 炭車に因る災害防止について 賢母の苦心 伊勢参宮記 陣中通信 つるべのない井戸 文苑 お山の石 新原俳壇 俳諧 去年今年 炭坑の務め 朝に折り夕べに感謝 勤勞報國の歌 戦地吟 友の入營に際し 雜録 銃後の赤誠 辭令 躍進採炭部展望 書道欄 蔬菜展覽會 二月中行事豫定表	片岡覺太郎 庶務科 國武工務主任 松堂生 野瀬生 木原徳次郎 大串満 市丸勇 市丸勇 多田納善英 林勇 原田白雨 石橋正	採炭部長	須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十四年三月號	第一六卷 第一八三號				
昭和十四年四月號	第一六卷 第一八四號				
昭和十四年五月號	第一六卷 第一八五號				
昭和十四年六月號	第一六卷 第一八六號				
昭和十四年七月號	第一六卷 第一八七號				

昭和十四年八月 號	第一七卷【ママ】 第 一八八號	記事 勅語 大山祇神社 陣中通信 文苑 新原俳壇 會計科は人がいゝ 逝ける名犬 戦戦俳壇 病院の朝 行案 銃後生活の所感 旅の思出 我は探掘員だ 聖戦二年 晩鐘 薄暮の歩哨 御霊祭り くちなし 児童文苑 雜錄 支那事變勃發二周年記念式 無駄無シ運動生産擴充週間 辭令 庭球部對外試合 野球部より 剣道部遠征 卓球部對外試合 相續く金字塔 書道欄 鑲旗圖案懸賞募集 八月中行事豫定表	船山主計中佐 川畑常吉 好球生 林勇 二露 丸山倉太 稲永白雨 熊谷隆 石橋正 高橋生 川添生 久芳時江 本川茂 稲永白雨 金子ふじの 久保田春夫		須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十四年九月號	第一六卷 第一八九號				
昭和十四年十月號	第一六卷 第一九〇號				
昭和十四年十月 三十日	創業五十周年記念號 第一六卷 第一九一號	創業五十周年記念式典 海軍燃料廠採炭部沿革 歴代所長、部長並科長 行事 地方文化 回顧録（その一） 回顧録（その二） 年譜 懸賞文苑發表		口絵には歴代所長の写 真が掲載	須恵町立歴史 民俗資料館蔵
昭和十四年十一 月號	第一六卷 第一九二號	記事 軍法會議の裁判権回復 村山源七君の發明特許さる 世界に於ける日本の地位 靖國神社臨時大祭 銃後援強化週間 無駄無シ運動生産擴充週間 文苑 あゝ末岡准尉 陣中通信 新原俳壇 軍艦機名を見学して 見学 日章旗 秋の日の想ひ出 秋 小雀 東亜の偉業 海軍野球チームを絶賛す 中支戦線雜詠 雜錄 銃後の赤誠 辭令 六坑會生る 庭球部の活躍 野球便り 秋季部内排球大會 書道欄 十一月中行事豫定表	樋口芳包 吉田松堂 畠江勝 長尾一夢 稲永利雄 西田廣武 木原山明吉 林勇 城源寺袈裟六 石橋正 石井生 郡道雄		須恵町立歴史 民俗資料館蔵

現存する表紙を見ると、時代とともに変化を生じている。第六〇號（昭和四年一月）では、半円の中に花柄を描き「新原」としたマークの上には、鶴が二羽飛翔している。それが第七〇號（昭和四年一〇月）ではマークの上は花柄となっている。第二七號（昭和九年八月）では、半円の中の「新原」としたマークは簡略化され、その上には第五坑の風景と海軍燃料廠採炭部のマークとおもわれるもの、「THE SHIMABARU」の文字が見える。第一三八號（昭和一〇年七月）には背景の絵は図柄となり、第五坑と硬山を描いている。その下の線は炭層を表したものと思われるが、第十四五號（昭和一一年二月）、第一六九號（昭和一三年二月）にこれらの図柄に少しの変化が見られる。そして、第一八二號（昭和一四年二月）には「新原」の墨書だけとなっている。おそらく、戦争が進む中での変更であろう。表を見てわかるように、第一八一號（昭和一四年一月）は号数が合わないのに、併合して作成したものもあると考えられる。また、昭和一四年一〇月三〇日発刊の創業五十周年記念號は、第一九〇號（昭和一四年一〇月号）と号数を分けていると考えられる。次に内容について触れる。

第六三號（昭和四年三月）では、海軍燃料廠採炭部中央病院の落成式が二月一三日に行なわれたことがわかる。

第六四號（昭和四年四月）では、英国で炭鉱失業所者が問題化し、一月二九日にダラム地方に英国皇太子が視察された記事が載っている。この投稿は海軍技師猪俣昇氏のもので、氏は昭和三年八月十日から翌年七月十九日まで欧州視察をしており、タイムリーな記事といえる。旧志免鉱業所堅坑櫓を設計した人物でもある。

第六七號（昭和四年七月）では、海軍燃料廠採炭部新庁舎地鎮祭が六

月一三日に行なわれたことがわかる。

第七一號（昭和四年一月）は、創業四〇年記念号となっている。海軍燃料廠採炭部沿革並びに現状が記述され、投稿文書も数多くある。一〇月一七日に行なわれた新庁舎の開庁式のこと載っている。

第二七號（昭和九年八月）のころから、戦時色は強まっていくことがわかる。この前年に国際連盟脱退をした日本は、当年三月に満州帝政を実施している。それでもまだ、機関紙の構成は記事（講話、学説、巡視、行事など）・文苑・書道・雑録・体育・通信といったもので、投稿者はペンネームを使うなど、その内容に自由な創作をしていることが窺える。体育については、鑛業所内の部活である野球・庭球などの試合結果などが記載されている。

第一三三號（昭和一〇年一月）になると戦時色は強まり、年頭の辞で上田課長は、「國權を重んじ國法に遵ひ、家を興し産を治め、勤儉己を持ち、常に公益を圖り私利を捨て私情を去り、一旦緩急あらば義勇奉公の誠を致すのが即ち大儀であります」と三千人の鑛業所員に唱えている。

第一六九號（昭和一三年二月）ころからは、記事・文苑・雑詠の基本は変わらないが、陣中通信などさらに戦時色の強い内容となっている。

採炭報国に邁進し、銃後の力となるため、鑛業報國強調週間や國民精神總動員強調週間を行なっていることがわかる。そして、国内では四月には國家總動員法が交付され、國民が戦争協力の総力戦態勢に入っていくことになるのである。

第一七三號（昭和一三年六月）は、七坑瓦斯爆發追悼号となっている。六月八日に五〇名の死亡者を出した惨事について記述され、殉職者全員の写真も掲載されている。六月一日には海軍大臣、一六日には両陛下

の見舞金が届けられていることがわかる。

第一七四號（昭和十三年七月）には、家庭欄が設けられ家庭栄養料理献立なるものが、七ページにわたり記載されている。健康増進を図っている記事は興味深いし、戦時の朝・昼・夕食の形を垣間みることができる。

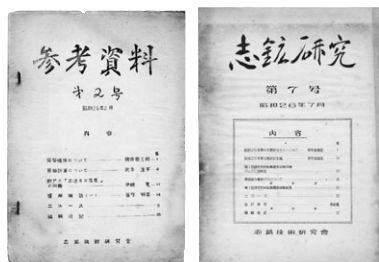
第一九一號（昭和十四年一〇月三〇日）は、創業五十周年記念號で、一〇月二三日に櫻ヶ丘大山祇神社祠前において記念式典が行なわれ、共済組合会館において祝賀会が執り行われたことについて記載している。雑誌は、頁数も二〇〇七〇頁であった。また、六二・六六・六八・七一號の最終頁に博多湾鉄道の広告が載っていることは興味深い。

次に、『志鋳研究』は、志鋳技術研究会が編纂・発刊し、昭和二六年一月に創刊された雑誌である。現存数は二四冊あり、表紙への鉛筆書きや押印から、渡辺利雄氏旧蔵と推定される。

『志鋳研究』の体裁はB五判謄写版刷りで、無線綴であった。福岡市千代荘町四の千代プリント社が印刷をしている。終期は不明である。

内容的には鋳業所に関する技術に関する記事に多くを割いている。しかし、戦前の雑誌『新原』とちがい、専門的な機関紙となっている。ときには時事（ニュース）などを含んだが、技術研究の他に、保安、管理、運搬、経理など、専門的な機関紙となっている。

以下が、『志鋳研究』目次の抜粋である。



（参考資料と志鋳研究の表紙）

表2 志鋳技術研究会発行『志鋳研究』総目次*

題名	号数	発行年月	目次または内容	執筆者	寄贈者
参考資料	創刊号	昭和26年 1月	巻頭言 発刊に際して 鋼支柱使用に際しての採炭規格並びに技法の改善 炭理とその採炭上における意義 地圧利用採炭法 昭和25年を顧みて	所長 竹内谷雄 国武干城	
参考資料	第2号	昭和26年 2月	保安確保について 原価計算について 断層の「正逆及落差の問題」 運搬雑話（一） ニュース 編輯後記	鶴田國三郎 武本澄平 伊崎晃 岨守好年	星加照雄
	臨時増刊号	昭和26年 2月	米国極東空軍管理学教育計画		
	第3号		通気計画について 掘進作業について 掘進能率向上運動上半期総合成績について	宮崎園作 中山新作	
	第4号		通気磨【摩】擦係数について 九州地方炭坑に於ける採炭切羽の現状	宮崎園作 石炭鋳業協会	
	第5号		当所に於ける賃金水膨れの状態 最下戸【層】炭に関する知識	労務課 伊崎晃	
	第6号		第八坑に於ける鉄柱使用報告 測凡【風カ】者と測凡器との距離が測凡結果に及ぼす影響について 第六坑本卸300HP電気巻揚機用ロープ切断事故調査	原田豊 篠塚政之 工作課	
志鋳研究	第7号	昭和26年 7月	昭和25年度の災害状況をかへりみて 昭和25年度災害統計年報	保安監督室 保安監督室	星加照雄

			第1回保安技術職員国家試験問題ならびに同解答発 破後の毒性ガスについて 第1回保安技術職員国家試験結果 ニュース 会計報告 編輯後記		
志鉦研究	第8号	昭和26年8月	8坑に於けるダツクビルの使用 立坑に於ける三段追掛払について 事故調査について 発明考案	鉦務課 立坑副坑長 樋口欽治 鉦務課 篠塚政之	
志鉦研究	第9号	昭和26年9月	八坑(一) ギャルボー卸の炭車逸走事故について 鋼索について ガス突出に対する災害防止の一考案 石炭鉦山保安規則の一部改正 同上解説 昭和25年度作業統計表 ニュース 編輯後記	事故調査委員 工作課 福山峯幾 監督室 通産省令【47号】 保安情報 鉦務課	福岡地方 史研究会
志鉦研究	第10号	昭和26年10月	昭和26年度出炭について 深部坑道および採炭切羽に於ける地圧統制に就て さくがんき試験及び故障の原因 ガス検定器故障の原因及び修理法 大断面坑道の測風法について 発明考案 事故集計表 ニュース 編輯後記	鉦務課 保安監督室長 鶴田國三郎 工作課 諸石宏 保安監督室 三沢清扶 三菱保安部ニュース№2より 文獻抜萃 鉦務課	福岡地方 史研究会 星加照雄
志鉦研究	第11号	昭和26年10月 [11月の誤り]	深部坑道及び採炭切羽における地圧統制に就て(其の二) カッター透截溝に残るメタンガスについて 鋼索について(其の二) 水道の話(其の一) 直接職種別収得比率表 ニュース 編輯後記	保安監督室長鶴田國三郎 保安監督室 工作課 福山峯幾 工事部土木課 鉦務課	福岡地方 史研究会 星加照雄
志鉦研究	第12号	昭和26年12月	深部坑道及び採炭切羽における地圧統制について 炭坑爆発の解剖について 浮遊炭塵と、メタンガスの爆発限界の関係について 距離と傾斜の関係図表の考察 志免鉦業所鉦区の概要について 第二回保安技術職員国家試験結果発【ママ】 ソーダライムの炭酸ガスを吸収する能力について ニュース 編輯後記	保安監督室長 保安監督室 北海道鉦山学会誌第5巻第4号より 鉦務課 富久義通 鉦務課 富久義通 鉦務課 保安監督室	星加照雄
志鉦研究	第13号		“水素イオン”及濁度とは 第2回甲種上級保安技術職員試験問題とその解答 資料について 鋼作について(其の三) 租鉦権とは 3万屯級炭鉦人員及能率比較表	分析室 大久保嘉道 工作副課長 赤星勉 福山峯幾 富久義通	
志鉦研究	第14号 第2巻 第2号	昭和27年2月	選炭雑記(其の一) 水道の話(其の二) 作業環境よりみたる深坑に於ける払切羽の必要風量について 坑木、枕木等の防腐法制化への動き エアー洩れを知るのに便利な配管法 切上り坑道に於ける岩粉風道機 第八坑に於ける磐圧測定 立坑に於ける磐圧測定 発破又は火薬類の不時爆発による災害の要因 会計報告及び会費徴収方について ニュース 編輯後記	運炭課企画係長 岩橋惣吉 工事部土木課 三井三池 宮崎岡作 鉦務課 富久義通 第八坑保安係 八尋功 立坑副坑長 樋口欽治 技聯合【ママ】誌より	星加照雄
志鉦研究	臨時号		立坑機械設備 1 三井砂川鉦業所に於ける立坑設備について(昭27.1.) 2 三井砂川第一坑第一立坑1,600kw. ケーベ式ワードレオ ナード捲上機設備概要説明書	三井鉦山札幌事務所 長川宗三郎 三井砂川鉦業所 機電課	

			3 立坑開鑿機械設備について 立坑開鑿規格基準試案の 提唱 (昭27. 1. 20) 日立高速キブルローダー	日立製作所電工工場 石橋重遠	
志鉦研究	第15号		選炭雑話【ママ】(其の二) 蒸汽管保温の熱経済 第三回保安技術職員試験問題及解答 火薬の規格変更に関する報告 訂正	運炭課企画係 岩橋惣吉 工作課 熱管理士 永島博俊	星加照雄
志鉦研究	第16号	昭和27年 5月	鉱業所の出炭能率 ダックビル附セーカーコンベヤー説明並使用報告 (附ドイツの例) 「エヤーで吹かせ」はどれだけのエヤーを喰うか 使用されている鉄柱とその弱点 カツベ炭は何故流行るか 編輯後記		福岡地方 史研究会
志鉦研究	第17号		成木の濃れ具合から荷の大きさを読むには 硬山の体積の計算表 選炭雑話 (其の三) 大空600型ローダーに就いて ミリセコンド段発電気雷管に就いて (MSD) メタンガス湧出量、岩粉使用量坑内深度の大きい炭坑	日東鉄工 工事部 串山 運炭課 岩橋惣吉 立坑 桜島 石田 福岡鉱山保安監督部	
志鉦研究	第18号		古軌条で作った試作鉄柱の性能試験 新しいコールカッターの紹介 ダブルジブ、コールカッターによる採炭例 ミク【ママ】セコンド段発電気雷管 (其の2)	鉦務課、工作課 (アイコフ通信)	
志鉦研究	第19号	昭和27年 9月	埋蔵炭量計算の誤差と埋蔵炭量—一年出炭量— 炭 坑の寿命グラフ 酒殿卸自動開閉門について ツケマイトを利かせるには チエンコンベヤーの改良 上級保安技術職員試験問題とその解答		福岡地方 史研究会
志鉦研究	第20号		鉄柱性能にはばらつきがあると云ふ一例 古レール鉄柱の荷重試験報告 (其の2) 第4回火薬取扱主任者試験問題 志免鉱業所に使用中の各種鉄柱切羽関係一般資料 国産新型炭鉦機械製作現況	鉦務課、工作課 通産省石炭局	
志鉦研究	第21号		よりよい経営え 実木積モル枠の効果 カツベ採炭用2.4m鉄柱 (新大同製の性能) 修理職場で修理した鉄柱の荷重試験 外柱修理再生鉄柱の荷重試験	保安課 星加正一【ママ】 立坑 樋口欽治 新大同 工務課 工作係 (伯耆振興 新大同 福栄産業)	星加照雄
志鉦研究	第22号	昭和27年12月	カントの生産管理の原理 酒殿排気立坑開さくについて 電車坑道における自動開閉門扉について 坑木の耐圧試験 岩粉散布器 (定置用) の改造	保安課 星加正市 中山淳 第八坑 中山新作 貝島大之浦	福岡地方 史研究会
志鉦研究	第23号	昭和28年 1月	報文 穿孔法ガス板に就いて 低質炭対策 鑿岩機性能比較試験成績表 抄録 最近の炭坑爆発の安全度と威力について 日本油脂 パンフレットより ニ【ユ】ース 編集後記	第八坑 塚原省吾 工作課 永島博俊 工作課・立坑	福岡地方 史研究会
志鉦研究	第24号		最近の高炭価問題について カツベ採炭について 災害予防の科学的研究 (其の一) カツベ採炭弘見学レポート 炭戸【鷹カ】内の松岩仕繰	副長 内村豊 鉦務課 工作課 八坑副坑長 塚原省吾 大之浦東三坑	
志鉦研究	第25号	昭和28年 3月	報文 災害予防の科学的研究 ダックビル附シーカーコンベア最近の使用状況と その経済的価値について 第五坑に於ける災害半減運動を顧みて 抄録	保安課・星加正市 八坑・木【本の誤り】 原明 保安監査室・田中寿男	福岡地方 史研究会

			三連鎖引張破断試験成績表 さく岩機性能比較試験成績表 ニュース 編集後記	工作課 工作課・立坑	
志鉱研究	臨時号 [炭鉱 保安情報より]		規則改正 解説		福岡地方 史研究会
志鉱研究	第26号	昭和28年 4月	報文 災害予防の科学的研究 デタッチアブルビットの使用成績について ニュース 編集後記	保安課・星加正市 八坑・本原明	福岡地方 史研究会
志鉱研究	第27号	[昭和28年 ■月 表記なし]	報文 メタンガスの流動理論 酒殿排気立坑貫通測量について U.P.C ボーリングによる断層調査について ニュース	九大・生産研究所 助教授・江淵藤彦 立坑・測量掛 立坑・留守好年	福岡地方 史研究会
志鉱研究	第28号	昭和28年12月	報文 炭鉱技術者諸君に望む さく岩機用鑿の使用状況及経費について コールカッターの透載能の改良 災害予防の科学的研究 (3) ニュース 編集後記	秋田大学学長 工学博 士 佐野秀之助 工作課 明治鉱業株式会社 研 究課長 川上誠一朗 保安課 星加正市	福岡地方 史研究会
志鉱研究	第29号		年頭所感 講話 第一炭坑のガス爆発 技術ニュース 鉱山保安法の解説 電気メッキロープの使用結果報告 エヤーサポーターについて 統計より	副長 内村豊 篠塚政之 工作課 鉱務課	
志鉱研究	第30号	昭和29年 3月	年頭初【ママ】感 第八坑に於けるその後の事故災害半減運動の成果について 石炭岩石名称統一小委員会報告 坑内に発生する熱原の理論的な考察と風量増加に伴 ふ温度低下の統計的な推察に就いて 原価切下げの道 志鉱研究を顧みて	所長 平出彬 第八坑 地質委員会 立坑 小西正弥 保安課 星加正市 鶴田	
志鉱研究	第31号				
志鉱研究	第32号	昭和29年 7月	新しい時代の管理者 拂跡及其周囲に於ける地圧分布 Mining congress journal nov.1953 p30 ~ 33	保安課 稲益七之進 GLiichauf より八坑 八尋 燃料課 篠原	星加照雄
志鉱研究	第33号				
志鉱研究	第34号				
志鉱研究	第35号				
志鉱研究	第36号				
志鉱研究	第37号				
志鉱研究	第38号	昭和30年11月	一酸化炭素 圧縮空気について 精密可燃性ガス検定器の誤差について 採炭切羽実績表	セイフティ・ダイジェストより 工作課 永島博俊 保安課 星加博 鉱務課	星加照雄
志鉱研究	第39号				
志鉱研究	第40号				
志鉱研究	第41号	昭和31年 5月	職場に於ける追指導の隘路について H型コンベヤー用モーター焼損事故について 珪肺と粉じん防止	保安課松永義人 鉱務課 保安課	星加照雄
志鉱研究	第42号				
志鉱研究	第43号				
志鉱研究	第44号				
志鉱研究	第45号	昭和32年 9月	鋼支柱について 最近の海外技術・アメリカ 回転穿孔による大孔径立坑の開さく ルーフボルディング装置と使用状況	採炭課作業係 吉原茂美 採炭課作業係	星加照雄

雑誌では、編集後記から当時の状況が読み取れ、以下の事が理解できる。

第二号の編集後記によると、創刊号の配布実績は、五坑三一、六坑三〇、八坑二九、立坑二〇、工事区〇、本部一六、寄贈二一、保存二の一四九冊となっている。また、編輯委員は留守好年（企画委員室）・伊崎晃・富久義通（鉱務課）の三人である。

第七号の編輯後記によると、一ヶ月の会費が二〇円にあがったことがわかる。

第一一号の編集後記によると、第二号の刊行で一周年を迎えている。（第三〇号「志鉱研究を顧みて」から、昭和二六年一月が創刊号であることが確認できる。）編輯委員は留守好年（八坑）・篠塚政之（企画室）・富久義通（鉱務課）の三人である。

第二二号の編輯後記によると、創刊当時一〇〇名程度の会員数が、現在では約二倍の一九七名で、益々増加の傾向であることがわかる。また、当初の記事内容が、期間の技術雑誌からの引用が七割で、オリジナルなものが二割、ニュースが一割程度だったものが、オリジナルなものが七割を占めるようになっていた当所唯一の技術雑誌であることがわかる。

第一六号の編輯後記によると、編輯選任者が居なくなつて編輯事務が滞りがちで、会費もスムーズに集まらないでいることがわかる。

第一九号の号数から見て、一号分休刊かと思われる。

第二三号の編輯後記によると、会費が昭和二八年から年一五〇円に予定されることがわかる。

第二八号の編輯後記によると、編輯委員は松尾から鶴田に替わる。号数から見て、四月から一二月までの間、六号分休刊と思われる。

第三〇号の号数から見て一月または二月が休刊。「志鉱研究を顧みて」には第三〇号までの総目次を付している。

その他の雑誌としては、運輸省志免鉱業所機関誌である『国鉄志免』がある。創刊、終期は不明。内容的には鉱業所に関する物事を書いているが、論評、小説から、映画紹介、家庭洋裁、釣り情報、農事、漫画など現在の週刊誌のような趣がある。また、児童欄があり作文・俳句・詩などが掲載されていることは家庭用雑誌の趣となっている。

『国鉄志免』第二号（昭和二四年三月二七日発行）には、甲木繁「豎坑開鑿の想い出」の記述があり、現在国の登録有形文化財となっている「旧志免鉱業所豎坑櫓」の開鑿工事の概要があることは興味深い。

また、同時期には、国鉄労組志免支部機関誌『新声』、国鉄労働組合志免支部発行『えんどれす』があらわれるが、これらは労働組合の現状を謳ったものであつた。時代を反映している。

雑誌『新原』と雑誌『志鉱研究』をみてきたが、こういった出版が行なわれていた事は、石炭の採掘活動を行なう中で、健全な生産体制を確立するためのものであつたと考えられる。「保安・選炭・配炭」などの職場関係の現状を把握し、対策を練ることを主としているのであるが、有益な知識の他にも、雑誌に於いて家庭における共有の話題を提供し、一家円満の生活が災害の低下につながることを狙っているものと考ええる。

雑誌『新原』と雑誌『志鉱研究』のちがいは、その発行機関にもよるが、前者が、

一、御真影奉拝による士気の鼓舞

二、作業講習会による技術の習得

三、映画会による隣保の親善

四、説教所による信仰の許可

とならんで一般教育のひとつとして、情報交換の雑誌として大量的な伝達を行なつて、採炭報国にまい進したことが窺われる。これにたいして、後者は、国鉄の経営と変わった当鉱業所が、炭鉱経営という特殊な立場から出版されたサークル活動的な雑誌であつた。

昭和二五年六月には、当鉱業所では鉱業所並びに物資部職員の親睦を図るために、各種スポーツ、修養、娯楽の推進が行なわれ二二ものサークルが活動した。同様のものは、海軍時代にもあつたが、文化生活の健康化を念願したものである。また、昭和二七年度ころからは「明るい職場、楽しい街」運動が行なわれている。これには職場環境はいうに及ばず、家庭での生活環境の改善を図る事も目的とされていた。

こうしたなか、後者が発行されたのは、当所の独立採算が強調されるにつけ、専任業務以外の鉱務や保安技術、経営といったところまで、従業員の関心がでてきたところにあると考える。

発行元の志鉱技術研究会は、発起人が留守・伊崎・富久の三人であり、当時の所長の了解に依り刊行されている。創刊号に

本紙は毎日々々現場に忙しい人々の目となり、耳となつて、色々のことをお伝えしたいと思ふ、又それにも増して所内現場で生れた研究考察とか、作業の検討等を載せ、或は本場幹部に年度の基本方針を説明していただく等、職員相互の切磋琢磨と所内の相互連絡に一役果させることを更に切望するものである

とあり、本紙の目的が、係員の仕事上の常識を高めようとする点にあつ

たことが窺える。頁数も二〇〇五〇頁であつた『志鉱研究』は時代の流れのなかに、技術を追求し、発行され鉱員に愛され続けたのである。

いずれにせよどちらの資料とも、当時の国営的経営であつた炭坑の情勢を知る第一級の資料であることに間違いない。

五 おわりに

旧志免鉱業所の資料は、旧庁舎の火災により焼失しており、昭和二一年六月三日以前のもは皆無といえる。また、新庁舎が昭和二五年五月に竣工するが、その後の資料も閉山してからの整理事務所の変遷による途中で散逸している。今回の資料は、志免町教育委員会が、おもに福岡地方史研究会石炭研究部会（会長 石瀧豊美）に依頼し、二〇〇二（平成一四）年に収集したもので、退職者からの寄贈資料や、須恵町歴史民俗資料館蔵の複写資料である。

今回目の目を見るようになったこれらの資料の装丁は、西洋紙であり、和紙に比べて酸化が激しく劣化している。その上、謄写版刷りが多く、見えにくい部分も少なくない。今後の保管について慎重に行わなければならない。

旧志免鉱業所の歴史解明には、今後、欠落部分はもとより新聞記事を調査するなど、資料を拾い集める作業が必要となる。

今回の資料提示が、更なる雑誌の発掘につながることを切に望むものである。

注

- (1) 貝原益軒「増補 筑前國續風土記」文献出版(一九八〇・六・一九)
- (2) 田川郷土研究会「筑豊石炭礦業史年表」(一九七三・一一・三〇)
- (3) 志免町「志免町史」(一九八九・一〇・三二)
- (4) 糟屋郡分は「福岡縣地理全誌 十一―二十五」福岡県『福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌(二)』(一九八八・三・三二)により、席田郡分は「福岡縣地理全誌 一百二十五」福岡県『福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌(五)』(一九九三・三・三一)による。
- (5) 第四海軍燃料廠編「海軍炭鑛五十年史」(一九四三・七・五)
- (6) 糟屋郡役所編「糟屋郡志」臨川書店(一九八六・七・五)
- (7) 九州石炭局「九州炭鑛名簿」(一九五〇・七)
- (8) 志免町教育委員会『志免鉱業所遺跡』志免町文化財調査報告書第一五集(二〇〇五・三・三一)
- (9) 田原喜代太「志免炭鉱九十年史」(一九八一・一一・二〇)
- (10) (3)を参照

* 表1、表2について、字体についてはできるだけ元字を用いた。

福岡地方史研究会石炭研究部会(会長 石瀧豊美)調査による報告と、徳永の加筆により作成。不明な箇所は空白とした。